
Doll March 人形行進

瑞樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D011 March 人形行進

【NZコード】

N5628D

【作者名】

瑞樹

【あらすじ】

持ち主に知られないところで動いている、人形たち。そんな、人形たちの目線から見たこの世…。コメディーあり、恋ありの小説。

さあ、夜がやつてきたよ。一緒に行こうか。夢の町へ

今日は、いつもより肌寒かつた。秋といったって、十一月。そろそろ、雪が降つてもいい時期じゃないか？

僕の名前はソラ。アンティークドール。金髪で青い目。僕は今、窓際に忘れられたようにおかれている。僕の隣には他のアンティーグードールたちも居る。そいつらも僕と同じように忘れられていた。

「暇よねえ……」

緑のリボンを頭にして、緑と白のドレスを着て、僕の隣に座っているのはミドリ。金髪の毛先クルクルヘアに、緑色の目。緑一色。名前はみんな、持ち主に決められてるんだけど……ネーミングセンスが……。

「しうがなうだろ？ 今、持ち主が出かけていて、しゃべれるだけでもありがたく思えよ」

「わうね。でも……暇

「暇、暇、つるむとこ」

「ソラは暇じやないの？」

「暇」

「せりみなむことよー。」

まあ、暇なのはじょうがないじゃないか。暇なんだから……。

「……せっかく毎晝してたのに、お前らのせこで起きただらうが、

眠たそつな田をひすつて起き上がったのは、コウ。金髪で黒いタキシードを着てこる。田の色は茶色。

「毎晝つて……まだ朝なんですが？」

僕が言つと、コウはブスッとした顔を見せた。

「俺が毎晝つてこつたら、毎晝なんだよ」

「お前中心に世界は回つてないぞ?」

「俺中心で回つんと回じやだ」

「回じじゃなー」

僕たちはこりみ合つた。なんで、コウはこつでも俺様なんだ。まったく、困るよ。

「落ち着きなきことよ。別にビタだつていいでしょ?」

「落ち着きなきことよ。別にビタだつていいでしょ?」

「ふざけんなつー。ビタだつてもよくないんだつー。」

「私がどうでもこことつたら、ここのはー。」

「おこおこ、ニダコも俺様タイプか……。平凡は僕だけか。

「おい、そこでまたたりしているソラ。今、お前、自分のことほめてるかもしいけど、あんまり勘違いしないほうが良いぞ」

「なつー。」

「うん。ソラ。勘違いしないほうがいいと思うよ」

「いやこや、違つたる。なーこー」

「うそ」

なんだ、こんなときだけ意気投合してー

「たつだこまーー。」

下で持ち主の元気な声が聞こえる。僕たちはその声を聞いて、体を固くさせた。

僕たちは、主の前では動いてはいけない。体を固くさせて、どんなことがあっても動いてはいけない。持ち主の前で動いた日には、自由が消される。つまり、体が自分の思い通りに動かなくなるんだ。

「じゃーんつーわけひ、今日は久しぶりの子達のおでいれしまじゅつか」

持ち主は部屋に入るなり、窓際に座っている僕たちを見た。そして、近づいてきた。

「ソーラー君 ハードリちゃん ゴーウー君」

相当ご機嫌だな……何か良いことでもあつたのだろうか……？

今田ねえ、あたらしいお友達が増えますよ!。しかも...三人

ふ、普段お手入れしないのに、新しい人形をつれてくるのか！さすが、金持ちの娘。新しい人形つれてくるなら、まずは、僕たちの新しい服を買ってくれ。去年から全然、変えてないんだぞ。

「新しい子にはねー、新しい服をいつぱい買つてあげましたっ！」

……きっと今頃、他の一人も同じことを思つてゐるだらう。ふざけんなつ！

「じゃあ、今から新しい子をつれてきまーすっ！」

そういうて、部屋から出て行つてしまつた。僕たちのお手入れは

どうした。

「……家出したいと思うのは俺だけか？」

ユウの声は心なしか震えている。

「ううん……私もだよ？」

ミドリは笑顔だが、声が怖い。

黒いミドリは怖いんだよね。なんか、緑の目がどす黒い緑色に見えるのは、僕だけだらうか……？

「といふで……新しい子ってどんな子だらう……？」

「ミドリみたいな奴以外希望」

「コウが言つと、ミドリがキッとコウをにらんだ。

「どうじつ意味よー」

「そのままですよー」

「コウは勝ち誇ったような顔をする。ミドリは悔しそうに下唇をかんだ。……また始まった……。

「ん？あつ、電話きた」

「コウがそういうて、一人で話し始めた。

僕たちみたいな、動ける人形は神様が自由（自分が思つたとおりに動ける力）を与えてくれたんだ。そして、いつでも神様と連絡がつけるように全員に電話機能をつけた。この機能は、本人にしか聞こえない着信音が鳴つて、頭の中で操作すると神様と話せるようになっている。当然、僕たちのような人形同士でも電話できるんだ。

「えー。ミドリも連れて行くんですか？」

「コウがあからさまに嫌な顔をした。

「神様……ええ……そうですか……。それは……なるほど……じやあ、連れて行きます」

めずらしい。コウがミドリを連れて行くことに納得したとは……。おつと、言い忘れた。神様はミドリがお気に入りらしい。犯罪に入るほど。こないだは……ストーカーしてきたつけなあ。

「私、絶対いかないわよっ！」

ミドリが必死で反論する。だが、コウには届かないらしい。コウがミドリを神様の前に連れて行く理由は……コウじやないと、ミドリは逃げるかららしい。まあ、僕が前連れて行つたときは、逃げられたし。

「では、後ほど」

「コウがそういうついで、ミドリのほうを向いた。

「な、なによっ！」

「さつ、こいつか」

コウがこんなにいい笑顔をするなんて……連れて行つたらなにかもうえるんだな。

「ミドリ」

「ソラつー助けてくれるのね！」

「『』愁傷様」

「

「ええ…ひどいわよつーみんなしてー。」

「ウガがミドリの腕をつかんだ。

「よし、こいつか」

ミドリが必死に抵抗するが、力の強いコウには効かないらしい。

「離してよつー。」

「嫌だ」

……これぞ、田を瞑つていれば、泣いてる彼女となぐさめてる（？）彼女に聞こえるよね。持ち主はこいつ系の話が好きらしくいら、よくテレビを見てたなあ……。

「ソラつー助けてよー。」

「やだよ。大丈夫。安心して逝つてらっしゃい」

「ちよつと、言い方がおかしいでしょー安心なんかできないわよつー！」

ミドリは騒いでいたが、コウに引っ張られて窓から飛びだつてしまつた。

そうだ、僕たちには神様のところへ行くために、羽が機能されていれる。……機能って言うと、ロボットみたいだけど……まあいいや。

僕たちの羽は神様のところに行くとまだけしか、機能できないんだよねえ。

「ただいまー！」

あ、持ち主が帰ってきた。手には一人の人形が抱えられていた。

「あれ……？ミドリちゃんたちは……？」

やばいっ！ そうだ、忘れてた。どうしよう、ばれる可能性がある。

「まあ、いいか

いいのか、いいのかつ？ おこおこ。

「じゃ、サクラちゃんにこそこそひそねえ。お友達がたくさんいるよお

お

名前はもう考えずみか。サクラちゃんねえ……。

僕の隣に置かれた女の子は、茶髪のストレートで目が紅色。ひらひらしたピンクのドレスを着ていた。そして……すく、かわいかつた。この子は話せるのだろうか？

「じゃあ、他のお友達も持つてくるねえー！」

まだいるのかあーどれくらい、買ったんだ。
持ち主が部屋から出て行くと、その子は瞬きをした。

「あ、はじめましてです。名前はせくひなの」

凛としたきれいな声、胸の高まりがやまない。……人形つて病氣にでもなるのだろうか……。

「はじめまして。僕は、ソラ」

田を呑わせたら、なんか死にそうな気がした。

「ソラさんですねえ。俺、こうこうじいろ初めてなの

え？ 今、俺つて……。

D o l l M a r c h 一章 新しい仲間 1(後書き)

登場人物紹介

ソラ 金髪の青い目。自分の女の子のような容姿が嫌い。英國少年のよつたな服装を好む。

サクラは「俺」と自分のことを呼んだ。いやいや、何かの聞き間違えかもしれない……。人を見かけで判断するのは、いけないが、これは……顔と呼び方があつてい深い。

「ソラさん？」

「君……自分のことをなんて呼んでる？」

「ふえ？自分のことですか？」

「うん」

「俺です」

……素晴らしい笑顔つきだね。こんな……か、可愛い子が俺だなんて……。神様っ！何をたらしこんだんですか！

「俺、自分のことこういう風に呼ぶの、結構好きなの。俺、見た目からして弱くて……。だから、少しでも強くなりたいのっ！」

サクラは紅色の目を僕に向けた。その目は力強かった。

「やうなんだ……」

「やうやくーあの、ソラさんしかいないの？」

「いや、他にも居るけど……今出かけ途中」

僕は窓の外を見た。なんか、ミドリの叫び声が聞こえてきたつだ。

「ソラさん？」

サクラは僕の顔を覗き込んでくる。

「ソラさんは可愛いの。俺もかわいくなりたいの」

なりたかつたら、自分のことを「俺」と言うのをやめなさい。

「ソラさん。あつといいお嫁さんになれるのっ！」

そうだな……なれたらいいな。……ん？

「はあああああっ？」

「ふえっ！」

「だ……だだだ誰が女だと！僕が？僕が女に見えるとーー!!」
見たら？え？えつ？

「ふえ……ソラさん、女の子じゃないの？」

「ちがうっ！」

「……俺、ソラさんだったり、お嫁にしてても良このっ！」

ちよ、僕の心が軽く傷つぐ。向だこの子。さうっと、僕の地雷踏
んどいて、笑顔でいるぞ！

「やめにへだたー」

「なんで？ 可愛いの！」……

再び地雷踏んだよ、INIの子。しかも、妙にしょんぼりとしてるのですが！

いきなり叫び声が聞こえた。まさか、持ち主に動いているのがばれたつ？自由が……。

「ソラが……ソラが……」

声のする方向を見ると、ハヤヒロがいた。窓の回りで飛んでくる。

「あけてくれ」

「……なんだ……あ、うん」

僕は返事して、窓を開けた。すると、リビングには凄い速さでサクラを抱きしめた。

「ソラ……なんで、誘拐なんてまたしたの！」

はつ？

「あの時……ちかつたじやねえか……もつ、誘拐しないって」

「いやいや、なになに？」人の人たち。僕が誘拐したと？しかも、またってなんだよー。」

「大丈夫？」

リーリがサクラの髪をなでる。

「え…？え？」

サクラが混乱する。

「ンラッ…もひ、『んな』とほやめて……」

「君たちの勝手な想像もやめて」

「お前、また……くっ」

「ユウ、泣くまねしたって、涙出でないから。それから、なんだよ、またつて。記憶を作るな」

「違う……記憶は作るものじゃなこのよつ一生み出すものなのつー。」

リーリ、なにかつじつけたことこつてんのか。特にかつこよくないからね。ユウも回感しないで。そして、サクラは田を輝かせない。

「俺……おねえさまにこつてこつてのー。」

「ええ、こてきなれー。」

おこ、何青春してるんだ。誘拐した疑惑を作り出しておこて、そ
つちは青春ですか？

「ほほえましーじゅねえか……」

ちよ、コウ。なにホロリしてんのやつ！

ガチャツ

部屋のドアが開く。僕たちは再び体を硬くする。

「あれ？//リチャヤんたち戻つてゐる」

持ち主……さすがに気づくよね？

「帰つてきたのか。おかげり」

うわあ……メルヘン。

「はい、次の友達 チョウカヤんこの子たちが友達だよ」

持ち主の手から下ろされたのは、見たことない女の子だった。雰
囲気が僕たちと全然ちがつんだ……。

「じゅねえーー！」

そういうで、持ち主は出て行った。

「……ふわあ……」

チョウだっけか……？女の子は、あぐびをした。女の子は、黒い
髪の毛でおかっぱつていうのかな……？で、黒い目。黒い着物に赤

い蝶が描かれている服を着ていた。

「な……なにもんだ、お前は！」

「コウはチョウを指差した。人を指差しちゃいけないよ、コウ。

「……ん？ 我か？ 我は持ち主に名前をきめられた。名前はチョウじ
や」

また、人形が増えた……。しかも、しゃべり方が、不思議な人形
が……。

D o l l M a r c h 三章 新しい仲間 2（後書き）

登場人物紹介

ミドリ。金髪で毛先がクルクルヘアの女の子。目が緑色。シンプルなドレスを好む。

チョウと名のつた少女は、大きなあくびをした。

「そ、そんなこと聞いてんじゃねえよっ！」

ユウはチョウを指差す。チョウはユウを無視して、僕を見た。

「そこの人」

チョウの目は強い力を持つている。目をそらすなと脅されているような気がする。

「なに？」

「名は？」

「僕の名前はソラ」

僕がそういうと、チョウがうつむいて、考え事をし始めた。ユウはチョウに無視されて、震えるし……。おもしろ。

ふと、チョウが顔を上げて僕の顔を見た。

「我の嫁にならぬか？」

「なりません」

なんだ、こいつは。初対面で、嫁になれと？いや、そこじゃない問題は（サクラだって言ってたからね）なんで、僕がまた女に見ら

れるんだっ！

「駄目なのー。ソラさんは俺の嫁なのー。」

サクラがチヨウの袖を引っ張りながら言った。いやいや、違うから。

「ソラ、モテモテだね」

「ユウリ。ちょっと、違うんだ。これは……嫌がりせじゃないのか？」

「ソラは嫁にやらとつー。」

「ユウーッーのるなボケナス！」

「ボケナスではありますん」

「カボチャーッ！」

「カボチャに失礼じや。ソラ」

チヨウがまつたりといつ。あ、そうだね。カボチャさんごめんなさい。

「お前らのほうこそ、俺に失礼だ」

「いやいや、それおかしいだろっ？」

「いやいや、それおかしいだろっ？」

「おかしくないって」

僕はこいつと笑顔で言つた。その笑顔にチョウが便乗する。

「お前ら笑うな。怖い」

「うわっー今、結構グサリときたぞ……。笑顔が怖いといわれました。僕はこれから笑えるのでじょーうか？」

「あーあ、ユウガソラを落ち込ませたー」

「ミドリがユウを指差す。そうだ、そつだつーもつといつてやれ。
「でも、ソラさんはユウさんにそれなりのひどこことを言つたのつ
！おたがいさまなの」

あれ？ サクラは、ユウの見方なのか？

「……………そこピンクの人の名はなんじゃ？」

チョウがサクラを見る。

「俺？俺はサクラなの」

「……………サクラ。女の子が俺と言つちや駄目じや」

チョウがサクラを強い目で見る。サクラは言つ返せないよつで、
涙目になる。

「なんで？ だつて……つよくなるんだもんつー」

「
許す
」

許すのかよ。チヨウも簡単に折れる奴なんだな。つて……//ドリな
に微笑んでんの?なんか、ほほえましいような目で見てますけど…
。

「青春」

「違いますよ。アーティさん。おーい、何かつてに青春と決め付けてるんですかね？」

「ソラ。黙つてて」

「いやいや、ちょ、なんで、僕にうまれなくちゃならないのさ」

「反抗期？別に反抗してるわけじゃないよね」

「なつ……なんで、僕の心が……？」

「口に思ひつかひ出したが、

「アーリが呆れるよ」いつ。あー……」「アーリに呆れられるって、ある意味傷つくな。

「で……ソラ。 我の嫁にならぬのか？」

「でつて……話戻さないでよ。 僕は、男」

「え？」

「おーとー！」

チヨウは皿を丸く寄せた。 もともと丸いけどね。

「やうなのか……アノマイイ、ぢゃ」

「え？ なにその慰め」

「慰めてるのではなこ’や。 ビ’ムジょ」

ガチャ

部屋のドアが開く。 僕たちはまたまた体を固く寄せた。 持ち主の手には男の子が抱えられていた。 金髪のような黄色の髪。 目の色は右眼が赤。 左眼は眼帯で隠れてて分からぬ。 服装は、僕と似ていた。

D o l l M a r c h 四 章 新 し い 仲 間 3 (後 書 き)

登 場 人 物

ユウ 金髪に茶色の目。服装は性格に合わせタキシードなどを好む。

第一印象は、僕と同じ苦労人になりそうな子だった。

「ここの子が最後の子だよ。名前はツキ君。みんなで仲良くするんだよ? あつ、これからママと一緒においしいもの食べにいくんだあ」

ソウデスカ。いつてらっしゃい。僕たちはまた動けるし……また、嫁発言があるかもしないけど……無視していい。う。持ち主の腕にかかえられていた子は、僕の隣に置かれた。

「よつし。増えたあ じゃあ、いつてくれるね」

持ち主はそういうて、騒がしい音を立てながら部屋から出て行つた。

「……」

ツキはしゃべらない。みんなここに来て、持ち主が出て行つた後動いた。あまり人前ではしゃべりたくない子なのか……?

「おー、ツキ」

コウはツキの前まで歩いてきて、肩を揺さぶった。

「おい、聞いてんのかよ?」

ユウ。初対面の人を乱暴に扱っちゃいけないよ。

「……やこの人。返事をしろ」

チヨウがツキを指差す。だが、動かない。コウはそれにイラッときたのか、ツキの肩を押した。すると、ツキはころんと倒れた。

「……動けないのか……？」

「コウが言つても、ツキは反応しなかった。

「なんだっけ……動かない子は何があつたんだっけ……？」

ミドリが言つと、サクラがチラッとミドリを見た。

「……悪いことをした子なの」

全員の視線がツキに集まつた。

「俺……神様にかけてみようか？容姿を言えば神様は分かつてくれるだろ？」

言つた後、コウは皿をつぶつて静かになつた。倒れているツキ以外はコウを見ていた。

「……あ、もしもし。俺です。コウです。あの……赤田で眼帯をしている男の子がウチにきたのですが……ええ……はあ……一生ミドリをそちらに連れて行きません」

そういうと、コウは皿を開けた。なんだ、何が起つたんだ。コウの皿は明らかに怒つていた。

「どうしたの？」

「…………なんか……田の色が両方違つてたからだそつ

だ」「…………なんか……田の色が両方違つてたからだそつ

「…………なんか……田の色が両方違つてたからだそつ

だ」「…………なんか……田の色が両方違つてたからだそつ

僕が大声を出す。

「ひどいの……差別なの！」

サクラはツキに駆け寄つた。

「かわいそうなの……ツキ君かわいそうなの」

「ふふふ、私、絶対神様のところへもついかない

ミドリが一ツ「口」と空に微笑んだ。

「我が神に頼んでこよつ。この人を動かすよつて

チヨウは静かに窓を開けた。空は天気がよくて、太陽の光がツキ
を照らしていた。

「僕も行く」

僕もチョウについていこうとしたが、チョウにとめられた。

「我が一人で行く」

そういうて、チョウは飛んでいつてしまった。

D o l l M a r c h 五章 動かない人形（後書き）

登場人物紹介

サクラ 茶髪の腰までのストレート。目が紅色。服装はひらひらしたドレスを好む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5628d/>

Doll March 人形行進

2010年10月12日07時22分発行